

# 目黒哲也 通信

市政について皆様の声を  
ぜひお聞かせください!

●発行人 目黒哲也

所属委員会 社会厚生委員会 副委員長 議会広報編集特別委員会  
南魚沼地域広域計画協議会 南魚沼市都市計画審議会

●連絡先 目黒哲也後援会事務所

〒949-6612 新潟県南魚沼市東泉田1076-1 TEL 025-773-6253  
携帯 090-4011-7563 E-mail kinseikan.tetsuya430623@gmail.com

目黒哲也通信のバックナンバーを希望される方は、メールあるいは電話にてお気軽にご連絡ください

## 新年のご挨拶

令和3年の年頭に当たり、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

皆様には、日頃から市政へのご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年は新型コロナウイルス感染症が世界を覆い、まさに世界中の人々にとって試練の1年となりました。このウイルスの猛威は南魚沼市においても生活や経済全般にわたって甚大な影響を及ぼし、その収束が未だ見通せない状況にあります。ただ目に見えないウイルスに苦しめられていますが、目に見えない人の優しさや温かさに助けられてもいます。引き続き、感染拡大防止と社会経済の活動の両立に向けて、関係各所と連携しながら取り組みを進めてまいります。

皆様にとりまして、この一年が幸多き年となりますようお祈り申し上げます。

## 12月議会トピックス

- ① 小・中学校、特別支援学校に手洗い用の温水設備を設置 (5,000万円)
- ② 医療のまちづくりを進めるために大和病院施設を調査 (300万円)
- ③ 人材育成の拠点をつくるための設計業務 (120万円)
- ④ 妊娠期から子育てまで切れ目のない支援をするための子ども家庭総合支援拠点 (1,554万円)  
※ ( ) 内は予算



12月議会において下記の一般質問を行い、皆様のお声を市政にお届けいたしました。質問と答弁は以下の通りです。(一部抜粋)

右のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると、一般質問の録画映像がご覧いただけます。



## 一般質問 再生可能エネルギーでの循環型社会への取り組みについて

市長答弁 重要課題である！ 地域性を十分生かし切った資源や方向性を打ち出す!!

**目黒** 豊かな自然と風土などの地域の特性を生かした雪氷冷熱・森林木質バイオマス発電・太陽光燃料電池・地下熱・小水力発電など、クリーンな新エネルギーへのさまざまな可能性を本市は持っているが、再生可能エネルギーでの持続可能な循環型社会の実現への取り組みについて市長の見解は。

**市長** 現在、持続可能な循環型社会に向かう取り組みは重点課題としなければならないと認識している。環境省と林野庁に、雪冷熱をクリーンエネルギーとして活用している本市の取り組みについて、すでに説明しており、これからの発展性についても話をしている。

加えて今後、モデル的な事業への取り組みには、南魚沼市は果敢に手を挙げる用意はしてあると伝えている。今、進めている自転車のまちづくりも、単に観光面や健康増進だけでなく、脱炭素社会への取り組みの一つでもある。また、新ごみ処理施設でのエネルギー再利用の構想も、私は脱炭素社会の中の大きな柱の一つだと思っている。

**目黒** 市長が考える、本市における再生可能エネルギーの主要資源は何か。

**市長** 一番の筆頭は雪。そして雪は水になるので、小水力、それから木材であると考えて。木材の利用は荒廃した里山の整備につながり、それは有害鳥獣の問題や防災においても連動していく。

例えば橋、特に林道の橋などはコンクリートではなく、今では木で造るという動きが出てきている。これは林野庁が盛んに言い始めている。薪を使う、またペレットを使うこともなかなか前に進まなかったが、今後はやはり前に進めていくべきである。

このように、これから造る林道の橋は木材に置き換える、また今後、造る公共施設には木材を何割かは必ず使う、加えて、その中の冷房関係は雪冷熱を最前提として考える等を義務化するべきではないかと思う。

小水力発電については、これまで実は、いろいろな業者から提案があった。今後はさらに加速してくるのではないかと考えている。

**目黒** 本市には、すでにバイオスタウン構想が作成されている。第2次総合計画の中では、「新エネルギーを活用するためにバイオスタウン構想に基づき、地域内のバイオマス活用を進める」と示されており、令和2年度には現在のバイオスタウン構想を抜本的に見直し、新たなバイオマス活用推進を策定すると掲げているが、進捗状況は。

**環境交通課長** 今年度に入ってからバイオスタウン計画の進みというものは、まだ会を持たれていない状況である。

**市長** バイオスタウン構想と威勢のいい感じがするが、実はなかなかその実態が今、動いているかという、まだ足踏み状態である。

**目黒** このバイオスタウン構想は大きなテーマであり、すぐに実績につながるものでもない。だからこそ5年先、10年先を見据えた方向性が大事であると思うが。

**市長** なかなか進捗できない大きなものとして、これまでのようにテーマだけ語り合っているだけではなく、やはり我々が、大きなテーマを打ち出さなければいけない時期が来ているのではないかと。

何事も目標を持って、市が動いていくということをしないと前に進まない。議会でも条例化や宣言をする、あるいは企業の力を借りるとか、そういうことを考える時期にきたと思っている。

**目黒** 方向性ということでは、私は雪氷冷熱と小水力発電、そして森林バイオマスと生ごみバイオマスは、本市では期待できる可能性があると考えている。

雪氷冷熱は雪氷冷房や雪室といった活用、小水力発電は本市の一般河川は流れが急流で落差のある砂防もあるため効果的である。森林バイオマスについては、取り組みを始めるには今が絶好のチャンスと私は捉えている。

それは、このたび雪国まいたけ様と南魚沼市、そして南魚沼森林組合の3社で、「雪国まいたけの森づくり」事業の協定が結ばれた。市の持っている大原運動公園の周辺にある63,000㎡の森林を5年間かけて、人と森が共生できる森林公園として整備するものである。

具体的には、荒廃している森林を間伐して木々が育ちやすい環境を整え、道を整備して人が訪れる空間をつく



るほか、伐採期を迎える杉を伐採して広葉樹を植栽することで、地力が高く景観の良い混交林をつくる。

これらによって、水源かん養機能の促進・バイオマスの生成・雇用創出・地域創生・企業や行政などのパートナーシップによる森林の持続可能性の確保などを目指していく計画であるが、市長の見解は。

**市長** 「雪国まいたけの森」は雪国まいたけ様の社会貢献的な事業のひとつであり、里山が企業の手で整備されるということは非常にありがたいことだ。すでに手が入り、遊歩道的なものが作られると聞いている。

企業の力を貸る事業はこれまで前例がなかったもので、本市としては新しい第一歩と思っている。今後は例えば、ふるさと納税の中にこのような事業を組み込むとか、いろいろやる手はあると考えている。

**目黒** 再生可能エネルギーの展開には、大きな財源も必要となってくる。そこで行政だけではなく、企業等とのタイアップが必要不可欠と考える。「雪国まいたけの森」事業を契機に、小規模な木質バイオマス発電所計画を加えることはどうか。

国も、地方ごとに小規模再生可能エネルギー開発を目指して、2030年には地域での再生可能エネルギー開発を掲げているところである。

**市長** これまでも数社から話があり、プロジェクトの動きはあった。しかし売電という部分で電力会社との調整がつかず、本市としてはストップしている状況である。実際にプロジェクトが進めば、里山の荒廃に手が入ることで雑木も含めた資材として利用できることで、財が生まれ、森林従事者も含めていい動きになると思っている。

ただ供給点等の問題もあり、本市だけで進めていくのではなく、広域的な連携をしないと達成し得ないプロジェクトだと思う。今後、必要があれば近隣市町村と協議していきたいと思っている。



**目黒** 生ごみ処理によるバイオマスだが、当市では全国でもいち早く進めてきたディスポーザーがある。生ごみは地域で眠る未利用な資源であり、ディスポーザーはその資源を効率よく効果的に集約できるひとつのツールである。

現在、六日町浄化センターでも流入された汚泥をメタン発酵してバイオマスガスとして発電し、だいたい施設の半分ぐらいの電気を賄っている。ディスポーザー設置が増えれば、さらに再生可能エネルギーが増えてくる。生ごみを下水道で処理するというリサイクル社会への第一歩となるディスポーザーの推進について市長の見解は、

**市長** ディスポーザーと関連し、国土交通省から使用済紙おむつの減量・リサイクル化の話が当市に来ている。冬期間の大雪の中で使用済の重い紙おむつを出す負担を減らす観点から話が進み、11月から全国初の使用済紙おむつの実証実験が始まった。

**下水道課長** この使用済紙おむつの件だが、11月2日から1か月間にわたり八色園で実証実験を行った。続いて2021年1月12日からまた1か月間、真冬での実証実験を行う予定になっている。

それから2021年度、粉砕型の実証実験についても立候補をしているが、今日確認したら全国で8団体が立候補しているようだ。その中で実証実験は1団体となる。決定は4月以降になる予定。

ディスポーザーについては、市内で現在60基の設置がある。今後は設置がどんどん増えてくると、その分の汚泥が増え、ガスの発生も多くなっていく。現在は一部を農業用肥料としてリサイクルしているが、ほとんどはガスを発生させてエネルギーとして活用している。

**市民生活部長** ディスポーザーの普及と直結してはなくても、下水道から生まれるバイオマスエネルギーは、市内エネルギーとしても可能性があるものだと思う。今後は、下水道処理でのバイオマスの利用は考えていかなければならないと思っている。

**目黒** 生ごみ処理から生まれるバイオマスエネルギーを増やしていくためにも、現在60基と伸び悩んでいるディスポーザー設置数を、今後どのような形で増やしていくのか。

**市長** 奨励したり、リフォーム補助に加えていたりしているが、設置数はあまり増えていない。使っている人間からしたら、ディスポーザーがない生活は考えられない。設置すれば本当に画期的に変わる。導入に向けて、さらに力を入れていくことは必要ではないかと思っているので政策化していく。

**目黒** 政策化にあたり、農業集落排水等のつなぎ込みが2020年度から始まっている。2020年度は五十沢西部処理場と宮処理場、2021年度は大木六・舞子・大里の3か所の処理場、2022年度には城内西部処理場と上原処理場、将来的には大和浄化センターもつなぎ込みを検討している。そうすると六日町浄化センターの処理能力が限界に達する可能性があるのでは。

**下水道部長** 六日町浄化センターの受け入れは可能である。ただ薬剤を投入する能力強化が必要と聞いている。まだ計画段階だが、大和地区の公共下水道を流域下水道に編入するとすると、県からもう1系の増設が必要であると聞いている。

**目黒** 加えて政策化するには、太陽光を取り入れたときと同様に、国と県と市で補助を出し合うようにすべきだと思うが。

**市長** そういうふうには色々仕向けていきたい。さまざまな連帯した市町村と国や県との連携は、今後の課題にする。

**目黒** 今後、再生可能エネルギーを政策化していく中で、国の「豪雪地帯対策特別措置法」を利用すべきと考える。その特措法に基づく豪雪地帯対策基本計画の中では、豪雪地帯対策特別事業に必要な経費は措置するとなっている。基本計画の中にある「保健衛生施設及び整備に関する事項」で、「積雪時に対応したし尿・ごみの収集体制及び処理施設の整備・拡充を図る」とあり、ディスポーザーに通じる内容として盛り込まれているものと考えられる。

また雪氷冷熱についても、基本計画の中に「雪冷熱エネルギー等の活用推進の事項」で、「雪冷熱エネルギー等冷暖房に活用する技術開発・公共施設への積極的な導入と民間施設への導入支援」、「雪冷熱の活用により加工・貯蔵した農産物のブランド化」とあり、雪冷熱を

使った施設あるいは雪室を使ったブランド商品の展開にも通じるものである。

豪雪地である当市から国に提案し、予算化するよう要望していくべきであるがどうか。

**市長** 全国積雪寒冷地帯振興協議会という組織があり、除雪費等、国への要望を上げる大きな運動団体がある。現在、花角県知事が全国の会長であるので、理事会決定で雪冷熱利用について話が進んでいる。

ディスポーザーの普及についても、雪国の難題解消や辛さ解消につながるのだから動いてみる。

**目黒** 使用済紙おむつの粉砕は、高齢者の負担軽減ばかりでなく、使用済紙おむつの焼却処理が減ることで焼却炉の負担を減らし、また処理コストの減にもなる。

また下水道処理で生まれるメタンガスは、発電として利用するばかりでなく、今、注目されている「CO<sub>2</sub>のフリー水素」にも転換できる。

このように、生ごみや使用済紙おむつ等による下水道処理によるバイオマスエネルギー、雪氷冷熱のクリーンエネルギー、森林バイオマスエネルギー、小水力発電と、当市は大きなポテンシャルを持っている。

これらを集約してこそ、再生可能エネルギー政策が活きてくると考える。今から着手していく考えがあるか。

**市長** 私は、最たるものが雪冷熱と考えている。広義な大きな話だけをしていても駄目で、やはり我々が持てるところで何ができるか、ということから入っていくことが必要ではないか。そういうことを一つずつ始めることが大事であると考えている。

そして再生可能エネルギーのいろいろな施策展開をやる中では、これは必ず産業化に、そして雇用に結び付けていく。それが社会構造を変えていくことになる。

再生可能エネルギーを利用し、脱炭素社会のテーマを掲げながら、そういう方向性を作っていくということが、非常に大きい目標ではないかと考えている。まずは我々の地域性を十分生かした資源や方向性を真剣に考えるべきである。



## めぐろの目

政府は、再生可能エネルギーの目標設定を義務化し、地域の再生可能エネルギーの拡充を後押しすると発表しました。南魚沼市の自然資源を活かした再生エネの主要資源は、私は、1.「雪」、2.「水」、3.「森林」、4.「生ごみ」と考えています。

### 1. 雪氷冷熱エネルギー

豪雪地という地域特性を活かした雪氷冷熱は、公共施設やデータセンター、また住宅の雪冷房として再生可能エネルギーとなります。またお酒や食品、あるいは薬剤等の雪室倉庫として活用もできます。



まずは、前号の「めぐろの目」で提言しました、旧第二上田小学校の体育館に雪冷房設備を導入し、室内スポーツ場として利用することで、内外へPRすることができます。加えて夏季災害時の避難所としても有効であると考えます。あわせて雪室倉庫センターの建設を進めることを提案します。

### 2. 小水力発電

当市は、豪雪の山間部で急流な一般河川や落差のある砂防ダムがあり、さらに流量が多い農業用水もあるので小規模な水力発電の展開は効果的であると考えます。



### キーワード⑪

## 南魚沼発ホワイトニューデール成長戦略(目黒案) ～再生可能エネルギーでの循環型社会～

### 3. 森林バイオマス

当市の森林面積は、市全体面積の76%を占めています。

このたび、雪国まいたけ様と南魚沼市・南魚沼森林組合の3社で、市所有の大原運動公園周辺地域にある約63,000㎡の森林を整備する森づくり活動に関する協定を締結しました、「雪国まいたけの森づくり」事業に合わせて、小規模な木質バイオマス発電所建設の展開は有効であると考えます。



### 4. 下水道から生まれるバイオマス

下水道の汚泥等から発生するメタンガスを燃料として発電することができます。現在の流域下水道六日町浄化センターは、流入された汚泥をメタン発酵してバイオガスとして発電を行っており、施設の2分の1の電気を賄っております。



2020年11月より、当市において国交省の使用済紙おむつの実証実験が開始されました。将来的にはディスポーザーで生ごみを粉砕して下水道に流すのと同じように、使用済紙おむつも粉砕して下水道に流す計画であります。よって、以前「めぐろの目」で提言しましたが、ディスポーザーの設置を推進することは必要不可欠であ

ると考えます。

加えて、国土管理から発生する除草時の枯草や剪定枝葉等を下水処理場に持ってきて、汚泥と一緒にメタン発酵させる方法等の調査研究も進んでおります。

さらに発生したメタンガスから、現在、注目されているCO<sub>2</sub>フリー水素への製造も可能であります。

下水処理場でさまざまなバイオマス原材料を集約処理し、地域の包括的な再生可能エネルギーの基地化を図ることは、今後のリーディングプロジェクトであると考えます。

以上のように、

- ① 雪氷冷熱エネルギーを利活用した公共施設やスポーツ施設・データセンター・一般住宅、さらに食品や薬剤等を冷却する雪室倉庫の産業化
- ② 雪解け水を利用した小規模な水力発電
- ③ 里山再生も伴う小規模な木質バイオマス発電
- ④ 流域下水道六日町浄化センターを包括的な再生可能エネルギーの基地化

の4つの事業をパックにした再生可能エネルギー構想「南魚沼発ホワイトニューデール成長戦略」の展開は、長期間を必要としますが、今から着手していかなければならない大事な課題であると思います。

「南魚沼発ホワイトニューデール成長戦略」は、将来において南魚沼の新たな価値を創造し、持続可能なまちづくりに大きな可能性を秘めていると考えております。